

大谷大学の俱舎学の伝統について

桜 部 建

一

標記の題目によって一文を草するように、との編集部よりのご依頼であった。

まず、「俱舎学」という言葉について思うのだが、この語がふつうに使われるようになったのは多分そんなに古いことではない。おそらく大正期以後あるいは昭和時代になってからではなからうか。深浦正文博士に『俱舎学概論』の著がある（昭和二六年、百華苑）が、これが書名の中に、「俱舎学」の語の現れた最初であろう。以前は、「俱舎学をやる」などとは言わず、単に「俱舎を学ぶ」とか「俱舎宗を学ぶ」とか言ったもののものである。「俱舎学」という呼び方は確かに、やはり同じ頃から使い始められた「天台学」（谷輝哲『天台学』大正八年）・

「華嚴学」（湯次了榮『華嚴学概論』昭和一〇年）あるいは

「真宗学」（金子大栄『真宗学序説』大正二二年）などの呼称と共に、長い歴史のある仏教の学問がその時期に新たに目指そうとした方向、新たに装うとしたスタイルを示すものである。

ただ俱舎の学問の場合、それが「俱舎学」と呼ばれるとき、そこには、仏教の教学の一部門としての『俱舎論』の研究という意味あいが強くなり、したがって、その俱舎の学がまた凡そ仏教教学のどの部門を学ぶにもそのための基礎学、入門の学、となるという、かつては広く常識的であった意味づけ（仏典講座一八『俱舎論』昭和五六年、はしがき、参照）が、そこにはあまり感じ取れないということがある。だが、その、仏教基礎学として俱舎を学ぶことの意義は、こんにちにおいても、変わっていない、と私には思われる。

今は「大谷大学」の「伝統」ということを考えるのだから、考察は大谷大学の前身真宗大谷大学、その前身真宗大学、さらにその前身に当たたる高倉学寮における俱舎の学にまで遡らねばならぬのであろうが、古い時代について私の知識は、ほとんど舟橋水哉『俱舎の教義及び其歴史』昭和一五年、法蔵館、の所述に尽きる。

舟橋師はその中（附録四五頁）で各宗の俱舎学者を列挙し、「大谷派にては」として法幢・法海・澄玄・了願・宝成・竜温・法宣・正純・徳霖・神興・潜竜の名とその著作を掲げておられる。

中でも、法幢『俱舎論稽古』二卷（大正、第二三二）は最も注目すべきものであろう。法幢（一七四〇—一七七〇）は孤高の天才（高倉学寮に学んだ人ではない）。この書を遺したのみで夭折したから、出自・経歴も人の知る所でなくなっていたのを、美濃の大谷派末寺の出と確かめたのは舟橋師である。『稽古』に含まれる斬新秀抜な研究内容については赤沼智善『仏教經典史論』昭和一四年、二八頁以下、宮本正尊『大乘と小乗』昭和一九年、四三六、七頁、参照。また、本庄良文『俱舎論所依

阿含全表』一、昭和五九年、に掲げられる図表の中の、Hotoの欄を見よ。

法宣『俱舎論講義』九卷、嘉永五年講、（桜井宝鈴増補・編集）明治三二年刊、は懇切でわかりやすい解説書で、学生が参照するにも最も適している（『仏書解説大辞典』が法宣著と宝鈴編とを別個の書として挙げているのは誤り）。法宣は大阪の人であるが、その履歴は明らかでない。桜井宝鈴については、ド・ラ・ヴァレ・プサンのフランス語訳俱舎論を英語に訳出したL・M・ブルーデンが、その英訳第一巻の序文の中で、記す所がある。

ロサンゼルス東本願寺別院輪番であった伊東抱竜師が私に『俱舎論』を読むのに何を参考にしたのかと問うたので、桜井宝鈴のものに依っていると答えた。師がさらにその釈書の日本での評価のいかなるものかを質すので、宮本・平川両教授が共にそれを推奨していた旨を告げると伊東輪番は目をうるませて言った。桜井宝鈴は私の亡父です、と。

俱舎に関する著書として格別のものを出した人でないので舟橋師はその名を挙げておられないが、泉涌寺の旭雅和上の『冠導俱舎』の各巻末に勸文者として名を連ね

る杉原春洞・瀬邊惠燈の二人も、この時代の太谷派の俱舎学者として記憶すべきであろう。杉原は後の真宗太谷大学教授豊満春洞である。

『俱舎論要解』一〇巻の著者普寂（俱舎の学のみならず八宗兼学の大学匠）は、もちろん舟橋師によって浄土宗の人として挙げられている。が、彼が伊勢の大谷派の末寺に生まれながら真宗の教えに飽き足らず脱し去った人であることも、記憶されてよい。

三

「学寮講義年鑑」（『真宗大系』別巻「総目録」所収）によって、高倉でなされた俱舎関係の諸講義の題目を知り得る。いわゆる三講者による主講義の題目とされたのはほぼ宗典に限られ、阿毘達磨論書が講ぜられるのはたいして寮司・擬寮司による内講・副講・会読などにおいてであった（時には擬講による内講もあったが）。講本とされたのは『入阿毘達磨論』『五事毘婆沙論』『有宗七十五法記』『七十五法名目』などが多い。講義の時間に限定があったこともあろうが、いかにも初心者のための入門の講義という色合いが濃いように見える。時には『俱舎論頌疏』や俱舎本論も講ぜられてはいるが、その全巻

に互った講義だったとは考えにくい。

講義者として二十人に余る名が見え、その中の宣明寮司・深励寮司・法海寮司（更に、法海擬講としても）・法景擬講らはいずれも後に講師に進んだ人々である。高倉のすぐれた学匠らの多くが、その若い頃、仏教の基礎学としての毘曇の講を、進んで担当した様子がそこに窺われる。

明治初年になっても、学寮の安居の制度は、あまり変わらずに三〇年近く継続したらしい。太藤順海『真宗大講義年鑑』によれば、高倉学寮時代とほぼ同様な毘曇の講義が楠潜竜・竜山慈影・蓮元慈広・広瀬守一の諸師（いずれも後に、講師）によって行われている。

四

いっぽう、明治に入ってしばらくすると、各宗に新たな近代的な学制が布かれる。太谷派においては、その最初の二十年ほどの間に、制度はたびたび改変され、学校の所在地も転々とする。

まず、明治一九年六月「真宗大学寮条例」が定められた。真宗大学寮は、新しい通年制度の学校と従来の安居制の学寮を一つに包含した形のものだったらしく前者の

第一期卒業生は明治二五年に出た（大谷大学同窓会『會員名簿』にそれを「真宗大学本科第一期」とするのは、多分、正しくない）。また、上記の太藤『年鑑』は後者における講義の記録である。

明治二九年六月に「真宗大学条例」が制定され九月から施行されて、真宗大学寮はその歴史を閉じここに初めて真宗大学が誕生する。本科四年、研究科三ないし五年の制であった（この制度による第一回卒業生を明治三〇年八月に出している所を見ると、新制度の施行に伴い旧制真宗大学寮の在學生はそのまま新しい真宗大学の課程に編入されて学業を続けたものらしい。それは真宗大学寮第一期生から通算して第五期生である）。本科第一部（宗乗を主とする）・第二部（余乗・哲学・科学など）共に、第一学年の全員が余乗の科目として俱舎を学んだ（週八時間。諸学科の中で最多時間数）。ちなみに第二学年では唯識、第三学年では華嚴、第四学年では天台を学ぶことになっていた。

明治三二年、再び学制が改まった。新しい「真宗大学条例」が作られ、予科二年・本科三年・研究科三年の制が定められ、九月から実施された。その予科の課程では余乗として全一学年が仏教教理史・俱舎（頌疏）・因明

を、二年生が仏教教理史・法相（成唯識）・三論（玄義）を学ぶ定めであった。本科は宗乗・華嚴・天台・性相の四科に分かれるが、その中、性相科の學生は第一年度においてさらに俱舎が八時間、第二学年度において俱舎・唯識が八時間課せられた。

この第二次の制度改革の二年後に真宗大学の東京移転が行われるということに注意しなければならない。迂闊にも人は、しばしば、真宗大学が明治三四年東京に「創立」されたように言い、あるいは、真宗大学は移東に伴って清沢満之師によってその学制に「根本的改革」が加えられたように言い、また、東京に移って「はじめて」哲学・史学・文学・語学の課程をおく近代的な大学になった、などと言うが、いずれも事実と異なる。語学はもちろん哲学も自然科学も、すでに真宗大学寮においてカリキュラムに入っていた。そして、明治三二年定まったこの新学制は移東以後も変わることなく、真宗大学はその歴史の最後の年までこれに依っている（ただ、明治三七年「専門学校令に依る認可を得る」ために、本科の宗乗科を廃し華嚴科以下の三科を第一歩ないし第三步と呼ぶように修正された）。旧制による真宗大学の最後の卒業生は大学移東後の明治三五年に出た（通算第一〇期）。

新制による最初の学生は三二年京都において入学し三七年東京で卒業した（通算第一期）。なお、最後の通算第二二期は京都において大正四年卒業。

明治三二年の新学制制定の時点において、大学を遠からず東京に移すことは予定されており（巢鴨では既に工事などが始まっていたかも知れない）、清沢師が移東後の新学監（学長）に擬せられていたことも確かであるから、師がこの新学制の制定の議に参与していない筈がない。おそらくその座の主導者の一人だったであろう。この点からも、制定から僅か二年後、東京で学制に「根本的」改革が加えられたなどは到底考えられない。

ところで、何度も制度を変更した真宗大学寮—真宗大学において、その学科課程の中に俱舎の学習が占めていた位置は、右に述べたところから明らかなように、ほとんど一貫している。すなわち、仏教の教理を学び始めようとする人々のための入門の学、基礎の学、としてのそれである。すべての学生が、入学してまず第一に俱舎の手ほどきを受けることによって、仏教思想の学びに入ることになっていた。

五

明治の最後の年、またまた学制の変更がなされ、「真宗大谷大学学則」が定められ（四五年三月）、大学の所在は再び京都の地に移った。新しい真宗大谷大学は兼修科三年、専修科二年・研究科四年の制であった。兼修科一年で俱舎・仏教概論が、二年で唯識・仏教概論が、三年で華嚴・天台が課せられ、専修科における余乗の選択科目の一つとして俱舎が二講義開設されている、などほぼ真宗大学時代と同様であるが、「仏教概論」の名が新たに登場するのに注意を引かれる。兼修科には声明・演説などの科目があるかと思うと、「文明史」などの講義があり、専修科には独文・梵文も開講され、哲学では哲学史・認識論のほか印度哲学なども講ぜられるという風で、確かにそこに時代の進運の反映がある。この真宗大谷大学時代の教授陣の顔触れはだいたい知り得る。性相の分野では、斎藤唯信（俱舎、唯識）・河野法雲（華嚴、唯識）の両師は真宗大学以来であるが、大正年間に入つて豊満春洞（上記。ただし専ら唯識を講じ俱舎の授業はもたなかったらしい）・小島恵見（性相史、唯識）・舟橋水哉（俱舎関係の授業をほとんど独りで担当したらし

い。叢書「仏教大系」の中の「俱舎論」「頌疏」の校訂を担当し、「大藏經講座」の『俱舎論講義』を出し、「仏書解説大辞典」の中では俱舎関係の多くの書を解説している）などの諸師が活躍した。大正期の後半になると金子大栄・鈴木貞太郎（大拙）などわれわれに身近な方々が教授陣に加わり、金子師は当初唯識を担当した。

やがて世は昭和の時代に向かい、真宗大谷大学が四たび蟬蛻して大学令に基づく大谷大学となる。以後の道筋は、改めてそれをここに辿る必要もないと思う。

右に述べた明治・大正期の経過の中に大谷大学の俱舎学の「伝統」というようなものを見いだすことは可能であろうか。はつきりその言葉に当たるものをそこから掴み取るのにも難しいように思う。ただ、徳川期からいうところの智山とか、豊山とか、泉山とか、野山とかの学系を考えて見るとするならば、豊満師は旭雅門下の上足であり舟橋師は豊満師の学を受けられたのだから、その限りで泉山の流れを汲んだものとは言える。法幢は『稽古』を高野山の一院で脱稿している。野山系の人と言えるかどうか。自ら「学一切乗沙門」と称したかれに、学系だの伝統だのと言えば、おそらく鼻の先で嗤ったであろう。

六

昭和初年、近代仏教学（「近代仏教学ということ」大谷学報六二―二、六六頁以下、参照）の進展にともなって、北伝阿毘達磨研究における大きな業績は、「国訳一切経」毘曇部三十巻の刊行である。その大部分は木村泰賢博士とその門下の人々によるものであったが、大谷大学からは赤沼智善教授が『順正理論』を、赤沼教授と西尾京雄教授が『三弥底部論』『尊婆須蜜菩薩所集論』を、林五邦教授が『顕宗論』を担当した。

ヤシヨミミトラの『俱舎論疏』については、かつて泉宝環教授が、南条文雄・笠原研寿両先学によってパリのビブリオテク・ナシヨナルで筆写されたものを、青写真にして学内の研究者に提供したということもあつたが、やがて、荻原博士がその諸本対校テキストを出し（昭和五―一一年）、続いてその第一章の和訳が出された（昭和八年）のを承けて、山口益教授は同じく第二章和訳の仕事に荻原博士と協力された（昭和九―一四年刊）。

その継続発展が戦後（昭和三〇年）出された山口益・舟橋一哉『俱舎論の原典解明 世間品』、さらに舟橋一

哉『同業品』（昭和六二年）であり、やがて桜部建・小谷信千代『同賢聖品』（平成十一年）に及ぶ。

舟橋教授には、また、『冠導俱舎論索引』があり、今は法蔵館刊の写真版冠導本（昭和五三年）の巻末に添えられている。これは水哉師の作ったものを一哉博士が数倍に拡大充実させたもので、後に出た平川博士らによる梵・藏・漢に互る『俱舎論索引』と共に、研究者を利することまことに多大である。

なお、俱舎学あるいは俱舎学関連のモノグラフとして舟橋一哉『業の研究』（昭二九年）、吉元信行『アビダルマ思想』（昭五七年）、佐々木現順『業論の研究』（平成二年）などがあり、桜部『俱舎論の研究 界・根品』（昭四四年）もある。

七

一九七〇年代以後のわが国において、俱舎論や阿毘達磨の研究は隆盛で、それ以前に比べほとんど隔世の感がある。二つのことがその機運を促すきっかけとなったように思う。一つはパトナからのP・プラダンによる俱舎論原文の刊行であり、もう一つは大谷大学蔵西蔵大蔵経の写真版刊行である。

貴重図書としてほとんど宝物扱いであった西蔵大蔵経が、一転、天下に公開され世界の学人らに広く提供されるようになったのには、鈴木大拙博士のアドヴァイスと時の学長山口益博士の決断とがあった、と聞く。龐大な蔵経の写真出版計画は資金面の困難から頓挫しかけたりもしたのだが、それを乗り越えて、ついに大出版の完成を見たトラジオの英語ニュースが伝えるのを、私はインド・ナールンダ研究所の一室でチベットの喇嘛リグジン・ルンドブ師と共に聞いた感銘を今も忘れない（もともと、リグジン師は西蔵大蔵経到北京版というエディションのあることを知らなかった）。

西蔵大蔵経の必要な箇所だけを図書館の書庫から借り出し、汚さないようにとおそるおそるノートに写し取ったり、複写紙で三、四部コピーを作って互いに分け合ったりした昔を回想しながら、四十年余り同じ大学に学ばせてもらった身は私かに次のように思うのである。大谷大学の学問に「伝統」というものがあるのかどうかよく解らないが、ただ、「歴史」は確かにある。長い歴史の流れがある。その流れの中に自分も育てられた、と。